

令和元年6月25日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02078

研究課題名（和文）後期デイドロにおける政治論と唯物論哲学の関係についての実証的・包括的研究

研究課題名（英文）Positive and comprehensive studies in the relationships between Diderot's political thought and materialism

研究代表者

王寺 賢太（OHJI, Kenta）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：90402809

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：デイドロの政治論に顕著な時局的性格は、自然史的過程のなかで政治体を捉え、時宜に応じた政治体維持の方策を模索する唯物論の立場から派生する。その政治経済学への関心も、個体と種の保存を政治の究極の目標とする生理学的・自然誌的観点に根差していた。だがデイドロは、そこからケネーらのように政治経済秩序の功利主義的最適化には向かわず、性的欲望・性的関係の次元の自律性を積極的に肯定し、政治的権力関係に対して社会空間の自律性を維持することを志向する。彼の「文明化」の理想も、所有権と労働の主体の確立から出発し、自律的な社会空間の形成を介して、自由な政治的主体の形成を目論む政治的・歴史的プログラムだった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果によれば、デイドロは、政治的自由主義（「資本主義と民主主義の結婚」の理想）と同時に、解放の大きな物語（「文明化」を目指す政治）の先駆者であった。さらに、この両側面は、生理学・自然誌に根差す唯物論によって基礎づけられた（生政治）。これら一連の視点は、啓蒙の政治理念が、今日なおどこまで有効であるかを考察する際に不可欠であろう。4年間に発表された仏語論文6本・邦語論文3本（近刊含む）は、デイドロ研究・『両インド史』研究の分野で高い評価を受け、研究代表者は2016年からは、『両インド史』批評校訂版編集委員会共同ディレクターとして、遅滞してきたプロジェクトの再始動にも貢献した。

研究成果の概要（英文）：Diderot's Political Thought is highly circumstantial, but this character itself derived from his materialist conviction, which grasps the political body in the Natural History process, and seeks the best way of its preservation in each circumstance; his interest in the political economy also rooted in his physiological and naturalist anthropology. Though, Diderot rejected the utilitarian maximization of the political-and-economical order like Quesnay; for the sake of the autonomous play of sexual desires, he rather defended the autonomy of the social sphere against political and hierarchical power relations. His ideal of "civilization" represents nothing but a political-and-historical program, that foresees the uprising of free political subjects as a consequence of the gradual formation of an autonomous social sphere within a political body. Thus, this materialist had been conducted to the consolidation/consecration of individuals as possessive and industrious subjects.

研究分野：社会思想史、フランス文学・思想

キーワード：唯物論 政治的自由主義 政治経済学 (反)フィジオクラシー 所有権 労働 文明化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者はこれまで、18世紀末フランスで生まれた、近世ヨーロッパの拡大史である、ギヨーム＝トマ・レナル『両インド史』(1770年/1774年/1780年の三版)を中心に、18世紀後半のフランスにおける歴史叙述・政治思想・哲学の関係に関心を集中させてきた。その傍らで、この『両インド史』の寄稿者であり、この歴史書の増補改訂にあたって主要な役割を果たした、哲学者ドニ・ディドロの政治思想にも関心を払ってきた。

ディドロ晩年の政治思想は、これまでロシア関係著作を中心とするジョルジュ・デュラックの業績、『両インド史』への寄稿断章を中心とするジャンルイジ・ゴッジの業績によって、きわめて詳細な文献学的検討が行われてきた。ただし、ロシア関係著作についても、『両インド史』についても、いまだ手つかずで残されている文献学的問題は残されている。しかしより重要な問題は、おおよそ1760年代後半以来活発に書き継がれるディドロの政治論について総合的な見解を示すモノグラフィーがまだ生まれていないことである。さらに、ディドロの政治論と唯物論の哲学の関係についても、十分な考察が行われてきたとは言いがたい。

### 2. 研究の目的

上で述べたディドロ研究・ディドロ政治思想史研究の現状に鑑み、本研究では1760年代後半の政治経済論(穀物商業自由化とインド会社特権停止をめぐる論争のなかでのディドロの「商業の自由」論批判)から、『両インド史』の三版(1770/1774/1780)への寄稿、ロシア関係著作(『哲学・歴史等雑稿』1773-1774、『勅令についての考察』1775)、および『エルヴェシウス論駁』(1775)、さらに1770年代執筆の『ダランベールの夢』や『生理学要綱』を経て、最晩年の著作『クラウディウスとネロンの治世についての試論』(初版『セネカ論』1778年、第二版1782年)に至るディドロの「後期」著作を対象に、ディドロの政治論の変遷を、その背景にある唯物論哲学の関心に焦点を合わせて分析し、後期ディドロの政治＝哲学の全貌を明らかにすることを目指した。なお、その際、アメリカ合衆国やフランス共和国に散在している『両インド史』関係の手稿を網羅的に精査すること、またロシアの古文書館でディドロ関係の資料を検討することを併せて目論んだ。

### 3. 研究の方法

本研究は「実証的・包括的研究」を謳った。一方で、ディドロの政治論を考える際には、1760年代後半から1780年代初頭まで、おおよそ七年戦争からアメリカ独立戦争までのフランス政治、およびヨーロッパを中心とする世界規模の国際関係の同様に留意せざるをえない。ディドロはこの同時代の政治情勢の変化に応じて、その情勢のもとで政治論を書き継いだからである。その意味で、ディドロのテキストと「実証的」なテキスト外の状況との突き合わせは不可欠である。また、この「実証性」には、ロシアに残されたディドロ関係の資料と『両インド史』関連の手稿とを文献学的に精査するという意図も託されていた。

他方、「包括性」で意図されていたのは、「後期」ディドロのテキストを網羅的に検討すること、同時に「政治論」とそれ以外の著作をア priori に区別することなく、むしろ「後期」ディドロのテキストの総体のなかで、どのように政治論と唯物論哲学とが分節されているかを問うという姿勢を示している。その際、当初「唯物論哲学」としては、二つの主題が焦点となると思われた。第一に、「身体」をめぐるディドロの生理学的・哲学的考察。ディドロにおいて「身体」は、「政治体」のメタファーとして重要であるだけでなく、個体と種の保存を根幹に置くその道徳論においても根幹をなすからである。第二に、時間論。ディドロの生理学的身体論は、身体を諸々の異質な要素(メンバー)の均衡のもとに成立する統一体と考える点に特色がある。逆に言えば、この身体の統一は、つねに不均衡にさらされており、均衡状態を維持する時間的な過程のなかに置かれている。また、ディドロにおいては身体的存在である個体はつねに種の再生産の一環であり、ここに道徳論・政治論における長期持続の問題、歴史の問題との接続点があると考えられるからである。

以上の方法論・問題設定に基づき、本研究では、ディドロのコーパスを時期と問題設定に従って、以下の四つに区分し、四カ年の研究の一年ごとに割り振った。すなわち、

1) 1760年代後半～1770年代初頭のディドロの「商業の自由」批判。ここではガリアーニの『穀物商業をめぐる対話』に関連するディドロの著作と『両インド史』初版のインド会社民営化論の相同性を明らかにし、それをケネー以下フィジオクラットと対比すること、その際、ケネーたちのパリ派の理性主義的・目的論的身体論とディドロの身体論の差異がどのようにかわっているかを測定すること、およびそこから派生する時間論・均衡論の差異に留意すること。

2) 1770年代前半、とりわけフランスで「モープーのクーデタ」によって高等法院が強制改組され、哲学者のあいだでは、専制批判が先鋭化する。ここで主要な考察の対象になるのは『両インド史』その際、ディドロの主要な批判対象となるのは、フィジオクラットの合法的専制論と、その身体論的裏づけである。

3) 1770年代中盤、1773年から1774年にかけてのロシア旅行の前後に書き継がれる一連の著作。フランス国内では、ルイ XVI 世の治世の初期、テュルゴがフィジオクラットとも軌を一にする政治経済改革に乗り出す時期である。ここではとりわけロシア関連著作と『エルヴェシウス論駁』および『ダランベールの夢』や『生理学要綱』の検討を通じて、身体論・人間論と政治論の結びつきを考察することが主要課題である。

4) 1770年代末から1780年代初頭、大西洋ではアメリカ合衆国独立戦争が戦われ、フランス国内ではテュルゴに代わってネッケルがフランスの戦時財政を切り盛りした時期である。この時期、ディドロは「アメリカの叛逆者たち」の共和主義に熱狂し、そこに歴史の新たなサイクルの開始を認めるとともに、フランス政治の現状については懐疑を深め、王国の身分秩序と経済的不均衡の相克に「腐敗」を認めていた。この「腐敗」から「国民の再生」へとというヴィジョンが、ディドロの唯物論哲学の個体と種の再生産のヴィジョンといかなる関係を持つかを考察することが課題となる。

なお、当初の計画では、各年にフランス・ロシア・アメリカ合衆国での資料調査を予定しており、『両インド史』関連資料・ロシア関連資料の調査を行うことを目論んでいた。

#### 4. 研究成果

以下に示すように、この四カ年の研究期間のあいだ、本研究の枠内で行われたディドロ及び18世紀フランス政治思想・歴史叙述論関係で発表した論文は、刊行予定のものまで含め、計10本。そのうち、6本がフランス語論文である。また研究発表・講演は、計8件。そのうち、6件がフランス語・英語でなされている。量的にも、その国際性においても、満足してよい結果がもたない。研究代表者としては、次項で述べるように、『両インド史』にかかわるレナル・ディドロの政治思想についての考察は、世界的に見ても先端的な成果を示しえたと自負している。なお、研究代表者は、本研究期間の2016年より、スイスのフェルネ=ヴォルテールに所在する国際18世紀研究センターから刊行中の『両インド史』批評校訂版の編集委員会共同ディレクターを務めることになった。

ただし、当初の目的からすると、この成果は決して満足のいくものではなかった。なにより、後期ディドロの政治論と唯物論哲学の関連についてのモノグラフィーを著すという計画は、まだ途上である。さらに、この4年間の研究成果は、『両インド史』研究・ディドロ政治思想研究においては優れた成果と評価できるものの、そもそもの問題設定であった、「政治論と唯物論哲学との関連」が、それぞれの成果のなかで十分に明らかにされているとは言えない。実際、ケネーおよびフィジオクラシーの政治的身体論との対比、あるいはエルヴェシウスの功利主義的人間学・政治論との対比を主題的に議論するには至っていないからである。

また、当初目指していたロシアでの資料調査、およびアメリカ合衆国・フランス共和国に散在する『両インド史』関連の手稿の調査も、十分に進めることはできなかった。ロシアでの資料調査に関しては先方の政情不安もあったが、本務校での業務のため、長期の調査旅行を実現できなかったのが実情である。この間、研究代表者は本研究課題とは別に、20世紀思想と現代政治を主題とする三つの論集の編纂にあたり（市田良彦との共編『現代思想と政治』平凡社、2016年；同『<ポスト68年>と私たち』平凡社、2017年；立木康介との共編『<68年5月>と私たち』週刊読書人、2019年）その仕事に時間をとられた部分もあった。その結果、この海外での資料調査のうち、十分な成果を果たしえたのは、2017年度に研究協力者のジャンルイジ・ゴッジ（ピサ大学名誉教授）と行った、『両インド史』関連の手稿の調査にとどまる。従来、ディドロの娘婿が執筆した『両インド史』第三版の改訂の準備稿とみなされてきた、この個人蔵の資料について、私たちの調査は、これが1780年代早くからレナル及びその協力者によって企てられた『両インド史』第四版の準備稿であることを明らかにできた。

けれども、本研究の成果に対する不満は、必ずしも本研究の失敗を意味するものでもない。本研究代表者はこの間、ディドロのロシア関連著作、『エルヴェシウス論駁』を精査し、新たな知見を得ることができた。その成果の一部は、すでに以下で述べるいくつかの論文として発表されている。とりわけ、本研究期間に取り組んだ、『両インド史』のイエズス会パラグアイ布教区叙述の研究からは、ディドロの政治=哲学における所有権の根本的重要性という新たな視点を獲得することができた。ディドロにおいては、身体・物件・不動産に対する所有権こそが、個人の自由と社会的関係の発展の出発点として位置づけられているのであり、ロシアや植民地に関して提案される「文明化」のプロジェクトも、アメリカ合衆国における新たな共和国の設立も、所有権を基礎に置くディドロの近代的政治観と切り離せない。逆に言えば、ディドロの唯物論哲学自体を、この所有権および「所有的個人主義」の側から捉え返すことが必要であると考えられる。その意味で、本研究は、当初の目的を達することはできなかったものの、『両インド史』研究およびディドロの政治思想・唯物論研究に新しい展望を開くものであった。

#### 5. 主な発表論文等

以下では、以下に挙げた論文のうち、本研究にかかわる主要な論文をピックアップしてその梗概を記す。

次項1)では、従来ディドロの寄稿にばかり光を当てられることの多かった『両インド史』が、1750年代以来、レナルが書き継いできた近代（=ルネッサンス以来の近世）ヨーロッパ国際関係史の延長線上に位置づけられるべき著作であること、そのプロジェクトの連続性は、『両インド史』を含む複数のレナルの著作で再利用される逸話の断片によって裏付けられること、そしてこの観点からすれば、『両インド史』は、同時期に執筆された未完の手稿『（ヨーロッパ）戦争史』と対をなしつつ、ヨーロッパの拡大の過程を、ヨーロッパ列強による海軍・通商・植民地の覇権の変遷に焦点を当てて描き出そうとする著作であることを明らかにした。

次項 2)では、『両インド史』第 13 篇に現れるカリブ海海賊についての叙述に焦点を当て、この海賊たちについてのレナル/ディドロの熱狂的な叙述が、彼らを生んだ、けっして持続することはないものの、それだけ特異で、歴史のなかにほとんどその場所を持たない人間集団として捉えることから来ること、とはいえ同時に、この海賊たちは『両インド史』の著者たちが奉ずる「文明化」の政治理想からすれば、歴史の過程のなかで排除されるほかに存在であったことを明らかにした。

次項 5)では、「公論」の政治性をプロモートしたとみなされる『両インド史』の「哲学者の政治」が、レナルにおいてはすでに 1750 年代のジャーナリスティックな活動のなかで、ルソーの『学問芸術論』に対する批判的応答に起源を持つこと、そこでは王国におけるメリトクラシーの実現のために、有用な知識の伝播と有徳な市民の顕揚が提唱されていたこと、レナルはこの延長線上に、七年戦争期には、軍事的な観点からの祖国愛昂揚キャンペーンに参画しており、『両インド史』初版でも、「公論」への介入によって国民的団結の強化を図ると同様の企図が、ただし今度はインド会社への投資を求めるキャンペーンのなかで見られること、そしてこの観点からすれば、ディドロの『両インド史』に対する決定的な貢献は、「公論」を「市民社会」と「国家」をつなぐ円環から切り離し、むしろ政治体内の相異なる要素の相克の場として捉えた点に認められることを論じた。

次項 7)では、1772 年の「政治的断章」、1774/75 年のロシア関連著作、1780 年の『両インド史』第三版におけるアメリカ合衆国擁護論、さらに同じ著作におけるフランス王国の「腐敗」から「国民の再生」へのヴィジョンを順に検討し、ディドロの出発点がモンテスキュー的な反専制論にあること、その際、ディドロは、ホップズが主権以前の段階に位置づけた「諸意志の協調・合流」の次元にあること、この「諸意志の協調・合流」の主題はロシア論においては、専制君主がイニシアティブを取って開始する、文明化 = 農奴解放の過程で実現さるべき議会の役割として取り上げ直されるが、アメリカ合衆国独立支持論においては、ヨーロッパの君主制国家のような主権的統一を持たない、新大陸の連邦共和国を支持するために呼び出されること、そしてフランス王国の「腐敗」から「国民の再生」へのてんぼうがかたられるさいにディドロが強調するのも、長期の過程のなかで、あくまで自生的に生成すべき国民集団の解体と再組織化のヴィジョンであったことを明らかにした。

次項 6), 9), 10)ではいずれも『両インド史』におけるイエズス会パラグアイ布教区叙述の変遷に焦点を当てた。この布教区は、1770 年初版においては、共有財産制と神権政にもとづく理想的な共同体として、インカ帝国とともに賞賛されていたが、最終 1780 年第三版では、ディドロの介入により、この肯定的評価が覆される。この経緯を詳細に追いながら、初版・第二版の段階で、一見手放しの賞賛とも見えるユートピア的叙述は、実際にはケネー以下フィジオクラットと反フィジオクラットの急先鋒であったマプリという相対立する論者たちが、それぞれインカ帝国の合法的専制とパラグアイの平等な共和国を理想化していたことに対するアイロニーを認めなければならないこと、初版・第二版の段階から、レナルは 1767~68 年の布教区廃止とイエズス会士退去の後、グアラニ人が新大陸に独立国家を建設するか否かにこの布教区の価値評価の判断を委ねていたこと、そして第三版で、ディドロがこの布教区に対する評価を覆すのは、グアラニ人の反乱が起こらなかったことを見届けてからのことだったこと、この判断はまた、所有権のない共同体においては、成員の競合心が失われるというエルヴェシウスの議論を継承するものであったが、その際、ディドロはむしろ所有権に「愛」をはじめとする単独的かつ間主観的な関係の起訴を求めることを明らかにした。さらに、この所有権から出発する間主観的・社会的関係の発展というヴィジョンが、ロシアの文明化論においても、マダガスカル文明化論においても、あるいはまたカリブ海植民地における黒人奴隷解放論においても繰り返されていること、また、この所有権に基づく文明化され、自由な共同体の理想こそが、グアラニ人の反乱の不在を見届けたあとのディドロが、アメリカ合衆国の独立に対して捧げた熱烈な讃辞の背景にあること、だとすれば、『両インド史』の奉ずる文明化=解放の理想は、18 世紀、商業資本主義によって覆われた世界の地の上に、リベラルでデモクラティックな国民国家共存体制を打ち立てることを理想とするものであったこと、ただし同時に、ディドロが抹消しつつ保存するパラグアイ布教区のユートピア的形象は、この近代の政治と歴史の空間がいかなる限界をもつものであるかを、ディドロ自身が十分に自覚していたことを示唆していることを論じた。

なお、研究成果として公刊された書物には、ジャンルイジ・ゴッジの論文集(監訳・解題)およびレナル『両インド史』批評校訂版がある。

〔雑誌論文〕(計 10 件)

- 1) OHJI, Kenta, « Raynal auto-compileur : le projet d'une histoire politique de l'Europe moderne » dans Cecil P. Courtney & Jenny Mander (eds.), *Raynal's Histoire des deux Indes: colonialism, networks and global exchange*, Oxford, Voltaire Foundation, « Oxford University Studies in the Enlightenment » (査読あり), 2015, p. 121-136.
- 2) OHJI, Kenta, « *Un événement singulier, ou le 'romanesque' en marge de l'histoire. À propos des aventures des flibustiers dans l'Histoire des deux Indes de Raynal/Diderot* »,

dans Noriko Taguchi (éd.), *Comment la fiction fait l'histoire : emprunts, échanges, croisements*, Paris, Champion, 2015, p. 53-68.

- 3) 王寺賢太「いとも厳密で継続的な検討——ペールと「迷える良心の権利」」、『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文研究会編）（査読あり）49号、2016年、p. 107-122.
- 4) OHJI, Kenta « Esprit de commerce, esprit des Lumières ? », compte rendu de Hisayasu Nakagawa, *L'Esprit des Lumières en France et au Japon* (Paris, Champion, 2015), dans *Zinbun* (査読あり), no. 48 (2018), p. 34-48.
- 5) OHJI, Kenta, « L'opinion publique selon Raynal », dans Antonella Alimento et Gianluigi Goggi (éd.), *Autour de l'abbé Raynal : Genèse et enjeux politiques de l'Histoire des deux Indes*, Fernay-Voltaire, Centre international d'étude du 18<sup>e</sup> siècle, 2018, p. 19-32.
- 6) 「抹消記号を付されたコートピア」、山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『われわれはどんな「世界」を生活しているのか』、ナカニシヤ出版、2019年、p. 263-289.
- 7) OHJI, Kenta, « Par-delà la volonté générale. Le 'concert de volontés' selon le dernier Diderot », dans Marie Leca-Tsiomis et Ann Thomson (éd.), *Diderot et la politique aujourd'hui*, Paris, Société Diderot « L'Atelier », 2019, p. 25-43.
- 8) 王寺賢太「18世紀西欧における国際関係の変動とコスモポリタニズム：フランスからの展望」、『日本18世紀学会年報』（査読あり）第33号（2019）p. 6-15.
- 9) OHJI, Kenta « L'utopie barrée : à propos des missions jésuites du Paraguay d'après l'Histoire des deux Indes », dans Lise Andries et Marc-André Bernier (éd.), *L'Avenir des Lumières/Future of the Enlightenment*, Paris, Hermann, à paraître en 2019.
- 10) 王寺賢太「『文明化』の方向転換——『両インド史』におけるイエズス会・パラグアイ布教区記述をめぐる」、齋藤晃編『宣教と適応—グローバル・ミッションの近世』、名古屋大学出版会、2019年度中公刊予定。

〔学会発表〕(計 8 件)

- 1) OHJI, Kenta, « L'opinion publique selon Raynal : du Mercure de France à l'Histoire des deux Indes », communication prononcée au colloque international *Autour de l'abbé Raynal : genèse et enjeux politiques de l'Histoire des deux Indes*, Université de Pise (Italy), 2016/02/03.
- 2) OHJI Kenta, « Overcoming Modernity? : Iwao Koyama's Philosophy of World History (1942) and its critics », at *Seminars in Global Intellectual History*, European Institute University (Firenze, Italy), 2016/02/08.
- 3) OHJI, Kenta, « Les lois-rapports et leurs dérivations : à propos du choix philosophique et politique de Montesquieu dans *De l'esprit des lois* (livre I) », conférence à la Faculté des Lettres de l'Université Nationale de Seoul, 2016/05/23.
- 4) OHJI, Kenta, « Esprit du commerce, esprit des Lumières ? — à propos de *L'Esprit des Lumières en France et au Japon* de Hisayasu Nakagawa », communication prononcée au workshop international « Être dix-huitiémiste en Asie de l'Est », à l'Institut de Recherches en Sciences humaines, Université de Kyoto, 2016/11/12.
- 5) 王寺賢太「18世紀西欧における国際関係の変動とコスモポリタニズム」、日本18世紀学会大会、共通論題「コスモポリタニズム」セッションでの研究発表、立教大学、2017年6月24日。
- 6) 王寺賢太「『文明化』の方向転換——イエズス会パラグアイ布教区をめぐる18世紀フランスの神学-政治-経済論争」、人間文化研究機構・国立民族学博物館共同研究「近世カトリックの世界宣教と文化順応」(研究代表者：齋藤晃)での研究発表、2017年9月18日。
- 7) OHJI, Kenta, « L'utopie barrée : à propos des missions jésuites du Paraguay d'après l'Histoire des deux Indes », au Congrès national de la Société d'études de langue et de littérature françaises, Université de Niigata, 2018/10/28.

8) OHJI, Kenta, « Les utopies barrées : à propos de la Chine, de l'Empire des Incas et des missions jésuites du Paraguay d'après l'Histoire des deux Indes », au Séminaire Japon-Coréen (JSPS) : « Dire la philosophie au XVIIIe siècle français », Institut de recherches en sciences humaines de l'Université de Kyoto, 2019/02/23.

〔図書〕(計 2 件)

- 1) ジャンルイジ・ゴッジ著、王寺賢太監訳・解題、逸見龍生・川村文恵・福田真希訳、『ドニ・デイドロ、哲学者と政治—自由な主体をいかに生み出すか』、勁草書房、2015年、289頁。
- 2) Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, t. 2, dir. Anthony Strugnelli-Gianluigi Goggi-Kenta Ohji, Fernay-Voltaire, Centre international d'étude du 18<sup>e</sup> siècle, 2018.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：ジャンルイジ・ゴッジ ピサ大学名誉教授

ローマ字氏名：Gianluigi Goggi

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。